仏訳『デカメロン』研究 III
ー三人目の「翻訳者」アントワーヌ・ル・マッソン，そして比較ー

平 手 友 彦

序

ジョヴァンニ・ボッカチオ Giovanni BOCCACCIO の『デカメロン』*Decameron* は，ローラン・ド・プルミエフェ Laurent de Premierfait によって 1414 年に初めて仏訳された。この仏訳を印刷書籍商アントワーヌ・ヴェラール Anthoine VERARD が大幅な加筆・修正をほどこして 1485 年に出版し，16 世紀に入るとこのヴェラール版は何度も版を重ねて数多くの読者を獲得した。その後，1545 年にはアントワーヌ・ル・マッソン Antoine LE MAÇON の新訳が出版される。本論は，既に論じた前者二人に続いてル・マッソンの仏訳の経緯を明らかにして，これら三つの「仏訳」を「ボッカチオの序文」proemio でイタリア語原典と比較分析することを目的とし，同時に『デカメロン』の本文の比較研究の導入を意味する。

本論に入る前にプルミエフェとヴェラールの「仏訳原理」について確認しておかなければならないだろう。まずプルミエフェの仏訳原理である [1]。そもそもプルミエフェがアントニオ・ダレッツォ Antonio d'Arezzo の協力によりラテン語からの二重訳という方法を用いてまで『デカメロン』を訳したのは，彼がこの作品を当時『デカメロン』以上に人気のあった『名士列伝』*De casibus virorum illustrium* の補完的な役割，つまり道徳的実践を拾い集めるべき物語集であり，「楽しさよりも役に立つことを多く見つける」«il [=l'escouteur ou liseur] trouvera es histoires racomptees plus profit que delict,»(Premierfait, p.2[2])作品と位置付けていたことにある。そのプルミエフェは自らの仏訳について，キケロ CICERO の『老年論』*De Senectute* の仏訳 *De la vieillesse* の序文の中で次のように語っている。第一に，ラテン語優位主義を唱えるプルミエフェとしては俗語（フランス語）が表現上十分に豊かではないので，分かりやすく明解な表現を用い，第二に，あまりにも簡潔すぎたり，不明瞭な部分を説明的な文で訳す [3]。仏訳『デカメロン』の「訳者による序文」Prologue du translateur の中でも同様に彼は，原典（プルミエフェの場合はラテン語訳）には忠実でありつつも，この作品を理解しやすくするために言葉足らずの部分は説明を入れ，曖昧な部分は明確な文章にした，とある。

> [...] je Laurens, assistent avec lui [=Antonio d'Arezzo], ay secondement converty en françoiz le langage latin receu dudit frere Anthoine, ou au moins mal que j'ay peu ou en gardant la verité des paroles et sentences, mesmement selon les deux langages, forsque j'ay estendu le trop bref en pluslong et le obscur en plus cler langaige, afin de legierement entendre les matieres du livre.(Premierfait, p.5)

「忠実」であるはずの彼の訳も，アントニオ・ダレッツォのラテン語写本が現存しておらず，その元となるイタリア語原典の写本も特定されていないために，この検証は困難である[4]。また，現存するプルミエフェ訳『デカメロン』の 15 写本（1 点は断片写本）のうち最古の写本は Vatican 写本（Vatican Pal.lat.1989）で，プルミエフェ直筆ではないながらも，彼の指導の元で作成された可能性もあり，今のところ最も忠実な写本とされている[5]。

このプルミエフェの仏訳『デカメロン』を 1485 年 11 月 22 日に活字本として出版したのがヴェラールである。印刷書籍商のヴェラールは 1485 年から 1512 年までに 280 点の刊本と 3 点の写本を世に出したが，彼の出版方針には一つのスタイルがあった。元来，飾り文字職人（又は細密画家）であった彼は写本製作を熟知しており，この技術を印刷本製作に組み合わせたのである。版本の幾つかを犢皮紙に印刷し，木版画や細密画（とりわけ，庇護者に書籍を献ずる自分の姿），それも当時の第一級の職人の手による木版画や細密画を口絵に配して，国王や大諸侯向けの（時禱書に代表される）献呈豪華本の製作にいたる。そうする一方で，当時の貴族階級のみならず，今までは読書の恩恵に与れなかった新たな書籍購買層を開拓していった。更に，原著者の序文（場合によってはインキピット incipit やコロフォン colophon のみでなくテクストの内容まで）を書き換えて，自分の「商売」に利用した。ヴェラールは書籍を「商品」と考えていたようである。

ところが仏訳『デカメロン』は必ずしもそのような戦略にもとづいた作品ではない。書き換えは随所に見られるものの，挿画は木版画一種類のみで，これがほぼ各日の第一話に繰り返し十回用いられている。駆け出しの「商品」と言われればそれまでだが，一見してシンプルで粗雑な出来の作品であった。この印刷に実際に携わったのはジャン・ドュ・プレ Jean DU PRE で，彼もまた当時王侯向けの豪華本製作者として有名な印刷書籍商であった。ヴェラールが使用したプルミエフェの写本の特定は，あまりにも削除・加筆・改竄が激しいために，これまた特定されていない。ヴェラールの出版に関する疑問点は拙論を参照していただくことにして[6]，こ

こでは，今回テクストとして使用したパリ B.N.所蔵版本（Impr., Res. Y2 402）について以下の点だけ指摘しておく。この版本には仏訳者の序文はなく，「ジャン・ボカスの序文」plogue de Jehan bocace から始まり，訳者プルミエフェの名前はコロフォンに一度登場するものの[7]，アントニオ・ダレッツォの名前はないという点である。16 世紀に入るとヴェラール自身がこの仏訳『デカメロン』を二度出版し，その後 1541 年までにパリの様々な印刷工房（1537 年には四つの工房）から続々と世に出る[8]。次なる訳者ル・マッソンが『デカメロン』の新訳に着手している頃にもヴェラール版『デカメロン』はパリの街に出回っていたに違いない。

アントワーヌ・ル・マッソンの仏訳『デカメロン』

フランソワ 1 世の「腹心の部下」ル・マッソン

さて，この新訳を完成させたル・マッソンであるが，彼の生涯については，仏訳『デカメロン』の先駆者であるプルミエフェ，ヴェラール同様分からない点が多い。彼の生涯に関する資料が少なく，新訳『デカメロン』の巻頭に掲げられた「マルグリット・ド・ナヴァール公妃への献辞」Epistre (Dédicace à Madame Marguerite de Navarre)と「フェレッティの手紙」lettre de Ferretti，それにフランソワ一世 FRANÇOIS Ier の証書 Actes (Catalogue des Actes de François Ier)と若干の資料しか残されていないからである。これらの資料からオーヴェット H. HAUVETTE とクルーゼ J. CROUZET がル・マッソンの生涯を調査しているが，これをまとめるとおおよそ次のようになる[9]。

1500 年頃	ローラン・ル・マッソン Laurent LE MAÇON とソフィー・ダルジャンソン Sophie D'ARGENSON との間に次男としてドーフィネ地方ル・ビュイ・レ・バロニ Le Buis-les-Baronnies に生まれる。
1531 年以前	フィレンツェに 1 年間滞在し，イタリア語を習得。
1531 年 8 月 22 日	ブルゴーニュ財務長 receveur général の食禄を得る。
1543 年初頭	戦時特別財務官 trrésorier de l'extraordinaire des guerres を兼務。
1543 年夏	王の参事官 conseiller となり，同年 8 月 13 日には財務長の職を辞する。
1545 年 11 月 22 日	パリのエチエンヌ・ロフェ Estienne ROFFET より仏訳『デカメロン』を出版。

1548年　　エチエンヌ・ロフェより仏訳『デカメロン』改訂版を出版。
1559年　　死亡？

フィレンツェの彫金師であり彫刻家のベンベヌート・チェッリーニ Benvenuto CELLINI は，ル・マッソンが『デカメロン』を訳していたと思われる 1540~45 年頃にフランソワ 1 世の宮廷に迎えられ，帰化免状を受け取ることになるが，これを届ける「王の腹心の部下」«un di quei primi sua segretari» がこの翻訳家であった。その際ル・マッソンが「きわめて徳高く礼儀正しく，じつに上手なイタリア語を話した」«Questo segretario era molto virtuoso e gentile, e parlava benissimo italiano:»ことをチェッリーニがその『自伝』*La Vita* の中で語っている [10]。チェッリーニの証言と，この任務の指名を受けたことから，ル・マッソンのイタリア語の能力は宮廷の中でも相当高く評価されていたことが分かるだろう。また，シャヴィ P. CHAVY によると，ル・マッソンは後にフランソワ一世のもとを離れ，マルグリット・ド・ナヴァール MARGUERITE DE NAVARRE の秘書官となり，クレマン・マロ Clément MAROT やジャン・ルメール・ド・ベルジュ Jean LEMAIRE DE BELGES の全集を校訂したらしいが，確証はない [11]。しかし，そうだとすれば，ル・マッソンは単にイタリア語の能力に長けていただけではないことになる。

仏訳の経緯とその実際

「マルグリット・ド・ナヴァール公妃への献辞」によれば，ル・マッソンが一年のフィレンツェ滞在を終えてパリに戻ると (1531 年以降)，たまたまマルグリット・ド・ナヴァールが 4～5 ヶ月パリに滞在していた [12]。その際，彼女のために『デカメロン』の幾つかの「物語」nouvelle を読むことになり（この時の言語は何か明記されていない），更にその場で『デカメロン』全体をフランス語に訳すことを命ぜられた。当初は自分の力不足や，次のような理由からこれを断る。第一に，何人かのイタリア人に『デカメロン』を仏訳することは不可能と言われ，事実，以前の仏訳（この「旧訳者」は複数形で，プルミエフェの名前がないことに注意）はこれ以上ひどいものがない程出来が悪いということ。

> i'auoye ouy dire à plusieurs de sa nation [=Italie], qu'ilz ne pouuoient penser, ne croire, qu'il fust possible que on le sceust bien traduire en Françoys, ne dire tout ce qu'il auoit dict: mesmes ayans veu par cy deuuant quelque telle quelle traduction d'aucuns qui se sont vouluz mesler de le traduire, qui y ont si tresmal besongné qu'il n'est possible de

plus. (Le Maçon, p.2)

第二にドーフィネ地方の生まれである自分のフランス語は必ずしも良いフランス語ではないこと。第三に，翻訳は初めてで，本職ではないので，人から非難されてしまうということ。

しかし，ル・マッソンは少しずつ「物語」nouvelle を選んで訳すと，トスカーナ人とフランス人から比較的忠実な訳という好意的な評価を得て，最終的にはボッカチオのイタリア語以上でも以下でもないフランス語に訳すことが出来た。

ayant en toute ma traduction prins peine de ne dire en nostre langue plus ne moins que Bocace a faict en la sienne.(Le Maçon, p.4)[13]

しかし，出版に際してもル・マッソンには二つの懸念があった。第一は，この仏訳を読めば，「ふざけた面白可笑しい」«follastres & plaisantes»[14]話があることに気付くはずで，こんな内容の翻訳，つまり他人の真似事のようなことで時間を無駄にしているという批判を受けるのではないか。第二に，このイタリア語からフランス語への翻訳よりももっと実のある仕事に精を出すべきではないか。これらに対しル・マッソンは，この訳業はナヴァール公妃を満足させ，「頭をリラックス」«recréer l'entendement»[15]させることが重要であったこと。また，この翻訳で自分の職務を妨げることはなかったし，翻訳するならもっと意味のある作品にしたらどうかとの批判には，ボッカチオと同じ論法で答える。即ち，この『デカメロン』に徳化の効用があることを次のような作品の一部（第四日目の冒頭と巻末の「著者による結びの言葉」）を援用して批判をかわすのである。「この物語から利益を得ようとする者には，それを得ることが出来，これを悪用しようと考える者にはこれを禁じない」。

Les asseurant bien qu'ilz ne veirent paraduenture de leur vie oeuure de plaisir, d'où l'on peust plus cueillir de fruict qu'on fera de cestecy, s'ilz l'y veullent bien cercher, aussi qui en voudra faire mal son profit, le liure ne les engardera point.(Le Maçon, p.5)

たとえ批判をかわすためであるにせよ，このように「楽しみ」に対して「徳化の効用」を強調していることは，ル・マッソンがプルミエフェ同様に『デカメロン』を「楽しみ」と同時に「役に立つ」物語集としてとらえていたことを示している。なお，このル・マッソン訳がどの程度忠実な訳であったかを判定することは，彼が

利用したイタリア語原典が特定されていないために極めて困難である[16]。

ル・マッソン訳の版本

1545年にロフェより出版された新訳『デカメロン』は，ボッカチオの本文の他に，1544年11月2日付けの「国王の允許状」privilège royal，「マルグリット・ド・ナヴァール公妃への献辞」，1545年5月1日付けの「フェレッティの手紙」[17]，「読者への無名十行詩」dizain anonyme aux Lecteurs[18]，「出版者から読者への緒言」avertissement de l'éditeur aux lecteurs の計六点からなる二ッ折版であった。「国王の允許状」により仏訳『デカメロン』を六年間売る権利を得ていたル・マッソンは，1548年に再び仏訳『デカメロン』を出版する。これは45年の二ッ折版よりもより安価で持ち運びに便利な八ッ折版で，ル・マッソンの手が入った改訂版であると同時に決定版であった[19]。その後，六年間の「允許」が切れた1551年には堰を切ったように三つの版（このうちリヨンのロヴィルG. ROVILLE版には「道徳的標題」titres moralisés が付けられる）が出版され，1560年までに，毎年のように版を重ねる。ロヴィルはこの仏訳『デカメロン』のヒットを受けてか，1555年にはこのイタリア語原典版までも出版した[20]。その後，16世紀中に11版，17世紀には9版出版されるが，これらは全て1548年決定版のテクストに，1551年のロヴィル版に使われた「道徳的標題」が付けられたものとなっている。私達にとって比較的入手しやすい19世紀の版では，1873年のラクロワLACROIXによるジュオJouaust版のみが1545年のロフェ版を採用し，1879年のボノーA. BONNEAUによるリズーLiseux版と，本論のテクストとして用いたディレーF. Dillayeによる1882-84年のルメールLemerre版のいずれもロヴィル版を元にしたのものである[21]。

ル・マッソンとロフェによるプルミエフェ訳の評価

先にプルミエフェ訳に対する評価を挙げたが，ル・マッソン訳を出版したロフェのそれも厳しいものであった。1548年決定版の「緒言」では，「旧訳はほとんど価値がないので，誰もタイトル以外は見ないだろう」と簡単に片づけられている。

> Ie m'arresteray à vous ramener en conte l'autre traduction du vieil temps: car elle estoit de si peu de merite que i'estime que nul homme de bon esprit ne voudroit maintenant la regarder seulement par le tiltre, aussi que ie pense qu'elle ayt prins telle fin que l'on pouuoyt attendre d'elle, apres ceste-cy, qu'vn tresexpert Maçon a si bien fondee & bastie, qu'elle n'est point pour se desmolir ou ruiner à iamais:(Le Maçon, p.8)

これではどのような意味で「価値がない」のか判然としないが，1545年初版の「読者へ」aux lecteurs では，ロフェの評価はもう少し具体的であると同時に一段と手厳しかった。旧訳はこの『デカメロン』の持つ「素晴らしさ」«dignité»を粉々に打ち砕いて，読者に対してひどい代物を作り上げた。それに比べれば，この新訳は月とスッポンで，賢者とめっかち,めっかちと盲者との違いほどあると述べる。

> Si ne devez ignorer, que le present Decameron (c'est à dire, affin que les dames et le commun peuple l'entendent, les dix journees de Bocace) a esté pieça traduit par quelques ungs, qui eussent mieulx faict de cacher leur ignorance, ou sacrilege et impieté par eulx commiz, en dechirant et mettant en pieces et par lopins la dignité de ce beau livre, que d'entreprendre chose autant mal seante à eulx, comme desplaisante à tous ceulx qui y vouldront lire, en conferant ceste traduction à la leur. Quoy faisans, je me persuade et asseure que chascun de nous y trouvera telle difference, comme d'ung fin or à xxiiij karatz à une cendree d'argent, qui ne tient que huit ou neuf deniers; ou bien (ainsi que l'on dit communement) autant à dire, que d'ung clair voyant à ung borgne, ou d'ung borgne à ung aveugle. [22)]

出版して売りさばく側からすれば，前作を叩いて，自らの「商品」を持ち上げる気持ちは十分理解できるが，それにしてもひどくはないだろうか。プルミエフェの訳はそれほど目を覆うような出来なのだろうか？これが一つの疑問である。と同時に，この旧訳に対する「非難」には，ル・マッソンの「献辞」同様，訳者名がなく，複数形で記されている。これは，ル・マッソンとロフェが仏訳者の名前を知らないゆえに，複数形で著したことを意味するのだろうか。それならば，プルミエフェ訳の写本の多くにはプルミエフェとアントニオ・ダレッツォの名前が記され，ヴェラール版にはプルミエフェの名前はあったはずで，ここから「非難」の対象としてル・マッソンが参照していたのはプルミエフェ訳の写本であったと考えることが出来るだろうか。それとも，プルミエフェ訳の写本とヴェラール版の両者を漠然と指したのであろうか。

「ボッカチオの序文」の比較

比較の方法

AとそのAから派生したBとの比較を行う場合は，Bが参照したAが確定されて初めて両者の比較が可能になるはずである。仏訳『デカメロン』では，以上見てきたようにプルミエフェ訳にイタリア語原典写本が，ヴェラール版にプルミエフェ訳の 写本が，ル・マッソン訳ではイタリア語原典（写本又は版本）が特定されていない。このような状況では選択の余地がないと言えば確かにそれまでだが，各々の仏訳をオリジナルのイタリア語原典，それも原著者が作成したものに一番近い所から出発して，その距離を測りつつ，それぞれを比較する方法しか今のところ残されていないだろう[23]。そして，その相互比較から各テクストの内在的な要素の分析が進むはずである[24]。本論及び今後の比較研究でもこのような方法を採っていきたい。なお，イタリア語原典はブランカ V. BRANCA がボッカチオの直筆原稿（1370年頃）としたベルリン Hamilton 90 写本を底本としたテクストを用いる[25]。

比較の実際

それでは，実際に「ボッカチオの序文」を比較検討していこう。

例 1　まず，ボッカチオが『デカメロン』の意図を語った部分では，プルミエフェ訳とル・マッソン訳はともに忠実であろうという努力の跡が見られ，重大な差はないように思われる。具体的には，同等比較の文型に多少の差はあるものの，単語レベルでは「続くべき」seguitare:「選ぶべき」eslire:「逃げ去るべき」enfuyure を除けば，「楽しみ」diletto:delectables:plaisir，「有益な忠告」utile consiglio:proufitable conseil:profitable conseil，「避ける」fuggire:fouir:euiter と原典に忠実である。先に述べたようにプルミエフェの序文では「楽しさよりも役に立つことを多く見つける」はずであったものが，ここでは訳の忠実さを優先している。

> delle quali le già dette donne, che queste leggeranno, parimente diletto delle sollazzevoli cose in quelle mostrate e utile consiglio potranno pigliare, in quanto potranno cognoscere quello che sia da fuggire e che sia similmente da seguitare: (Boccaccio, p.9)
> 「上記の婦人達は，これをお読みになれば，中に編み込まれたおもしろい事件で，或いは楽しむこともでき，または良い忠告を受けることもできるでしょうし，その忠告によって避けるべきことをも知り，また，従うべきことも知るでしょう。」（野上訳，1-p.49）

Desqueles cent nouvelles et chançons les jolies et amoureuses dames qui les liront ou ourront pourront prendre delectation es choses delectables monstrees en icelles nouvelles. Et aussi elles y pourront prendre proufitable conseil en tant que elles pourront congnoistre quele chose l'en doit fouir et quele chose eslire. (Premierfait, p.9)

desquelles les Dames qui les [=*Decameron*] liront pourront prendre, des plaisantes choses en icelles monstrées, plaisir & profitable conseil, d'autant qu'elles pourront congnoistre ce qui est à euiter, & ce qui est à enfuyure. (Le Maçon, p.17)

例 2　プルミエフェ訳，ル・マッソン訳ともにイタリア語原典に対して加筆説明がある場合。「何か新しい分別で」da nuovi ragionementi が「面白可笑しい新しいお話や物語で」par nouveaulx comptes de paroles joyeuses et de fables plaisens，「面白い新しいお話で」auec nouueaux & plaisans deuiz と「分別」の具体的な手段が示されている。

E se per quegli alcuna malinconia, mossa da focoso disio, sopraviene nelle lor menti, in quelle conviene che con grave noia si dimori, se da nuovi ragionementi non è rimossa: (Boccaccio, p.8)
「そうして，そうした思いごとから，或る種の憂鬱が，火の如き熱望に促されて（女性たちの）心の中へ忍び込んで行くとしますれば，何か新しい分別でそれを追い出してしまうまでは，重苦しい心労を懐くに相違ありません。」（野上訳，1-p.48）

Et se par telz pensemens aulcune melancolie, esmeue d'un embrasé desir, survient dedans les courages des femmes, il fault que celle melancolie sejourne en leurs cuers avec grant et grief desplaisir, qui ne peuest estre osté plus convenablemant, forsque par nouveaulx comptes de paroles joyeuses et de fables plaisens. (Premierfait, p.8)Et si à l'occasion d'iceulx suruient en leur entendement aucune melancolie meue d'amoureux desir, il fault qu'auec peine & fascherie grande elles y demeurent, si par fortune auec nouueaux & plaisans deuiz elles n'en sont ostées. (Le Maçon, p.16)

例 3　次に，プルミエフェ訳に欠落箇所がある一方で，説明的なところが多い[26]例。

プルミエフェ訳ではやや原文にはずれた構文を取り，比較の対象である「男の人に対して以上に」che agli uomini が省略されており，女性の「感じやすい胸」dilicati petti の訳が「甘く感じやすい胸」doulces et soueves poiterines と修飾語を加えた説明的な訳となっている。それに比べてル・マッソン訳は「胸」petti に coeur という解釈的な訳語を当てている。

E chi negherà questo, quantunque egli si sia, non molto piú alle vaghe donne che agli uomini convenirsi donare? Esse dentro a'dilicati petti, temendo e vergognando, tengono l'amorose fiamme nascose, le quali quanto piú di forza abbian che le palesi coloro il sanno che l'hanno provate: (Boccaccio, p.7)

「それを与えるとしますれば，その価値は果たしていかほどのものであるにしても，それは男の人に対して以上に，むしろ婦人に対して，更に必要だということを，何人びとか否定する人がありましょうか。婦人は，その感じ易い胸の中に，恐れながら恥ずかしながら，愛の秘密の火を隠して居りますし，それを実地に試した人は知っていますように，更にその火に対する見かけ以上にずっと大きな力を隠して居ります。」（野上訳，1-p.47）

Et si n'est homme qui nye que, de quelconque valeur soit le soulaz et confort de mon livre, je le doy plus raisonablement departir aux bonnes et belles dames, pour ce que elles dedans leurs doulces et soueves poiterines enserrent et cachent les flambes et chaleurs d'amours, qui ont trop plus de vigueur que celles qui apparent au dehors, ainsi comme le scevent les espreuveurs de la chose. (Premierfait, p.8)

Et qui sera celuy qui voudra nier qu'il ne soit trop plus conuenable donner confort aux pauures Dames, qu'aux hommes? Elles comme fort hoteuses & timides, tiennent le plus souuent dedans leurs coeurs delicatz les amoureuses flammes cachées, lesquelles combien plus de force elles ayent que les manifestes, cuelx le sçauent qui l'ont esprouué. (Le Maçon, p.15)

例 4「ボッカチオの序文」の最後の部分である。第一文はボッカチオでは二重否定で少々分かりづらい文であるが，プルミエフェ訳では説明を加えた上，肯定表現でよく整理された文になっている。この文はル・マッソン訳では丸々省略されている。この省略や例 1 の「続くべき」seguitare の訳のように，優れているはずのル・マッ

ソン訳にも不備な点はみられる。また，プルミエフェ訳では「男性女性，私達みんなに」nous tous, hommes et femmes という強調が入り，「喜び」piaceri については plaisirs, soulaz et confors の三つの単語で訳している。一語を複数の単語で訳そうとするこの傾向は，例1の jolies et amoureuses という修飾語句，liront ou ourront の ourront のような補足語句，例2や例3の grant et grief desplaisir, doulces et soueves poiterines のように随所に見られ，プルミエフェ訳の大きな特徴となっている。

: le quali cose senza passamento di noia non credo che possano intervenire. Il che se avviene, che voglia Idio che cosí sia, a Amore ne rendano grazie, il quale liberandomi da' suoi legami m'ha conceduto il potere attendere a' lor piaceri. (Boccaccio, pp.9-10)
「その話で気を散ずれば，苦悩も駆除されないではすまないと信じます。果たしてそうなるといたしますれば，（神も恵みを垂れ給うて，）婦人達は愛に感謝すべきであります。愛こそは私を桎梏から解き放して，その喜びに身を捧げる力を私に与えてくれたのでありますから。」（野上訳，1-p.49）

Le compte des cent nouvelles, ainsi comme je croy, fera passer et aneantir envers les dames leur desplaisir et ennoy. La quele chose, se elle advient, que Dieux vueille, nous tous, hommes et femmes, regrations Amour qui, en moy delivrand de ses filez, m'a donné puissence de vaquer aux plaisirs, soulaz et confors des dames. (Premierfait, pp.9-10)

Ce que si aduient, que Dieu vueille, en rendrons graces à Amour, lequel en me deliurant de ses liens, m'a octroyé le pouuoir de tascher à employer le temps à chose qui leur soit aggreable. (Le Maçon, p.17)

以上「ボッカチオの序文」でイタリア語原典と比較すると，細部には幾つかの特徴が見られるものの，この二つの「仏訳」には大きな開きはないように思われる。敢えてその違いをまとめれば，第一に，プルミエフェ訳は原典の一語に対して二語又は二語以上で訳す傾向がある[27]。この傾向はル・マッソン訳にも見られるが（例2の「ひどい苦痛と苦しみ」peine & fascherie grande），プルミエフェ訳の方が，本論の比較からも格段に多いことは一目瞭然である。これはプルミエフェが二重訳というハンディを意識していたことの現れで，訳語を付け加えて訳の不正確さを補おうとしたことの現れではないだろうか。第二に，プルミエフェ訳は「訳者による序

文」で彼自らが述べる通り，より直訳的で説明的である。第三に，これに対してル・マッソン訳は「マルグリット・ド・ナヴァール妃への献辞」で彼自らが語る通り，こなれた訳文を目指しつつ，若干問題はあるものの原文の内容をプルミエフェ訳よりもより忠実に訳したと言える。しかし，プルミエフェ訳の伊語—ラテン語—仏語という仏訳の方法や，1 世紀以上のフランス語の進化というハンデキャップを考えれば，これをもってル・マッソンやロフェが言うほどプルミエフェ訳がひどい訳であり，新訳に比べて雲泥の差があるとは言えないのではないだろうか。そこでヴェラール版に目をやると，「ボッカチオの序文」に当たるのは以上の二つの仏訳とは全く異なり，次の部分のみである。ここでボッカチオは「本や旅行で多くの事を知ることは人を賢くさせる」という単純な論理で始め，自分もそうなりたいと思って旅しているうちにフィレンツェに到着したとして，一気に本編に入っていく。

> En considerant que les anciẽs philozophes e autres gens clercs dignes e approuvez ont dit que ouyr les ditz de plusieurs et lire plusieurs livres et tournoier p plusieurs pays e veoir plusieurs choses font lõme deuenir saige pourveu q̃ les choses q̃l a ouyes leurs et veues il vueille retenir et mettre en sõ entẽmẽt. Je doncqs Jehan bocace sĩple desprit desirant la pfection de mon entendemẽt la qlle est de sauoir aĩsi cõe tous hõmes naturellemt le desirẽt ay voulu p plusieurs pties des pays habiter affin q̃ aucũe chose ie / peusse veoir et retenir qui me peust prouffiter[.] Si tournay tant p vng pays et p autre q̃ arriuay en la noble cite de Florence es pties dytalie [.] (Vérard, a.ii r.-v.)

プルミエフェ訳とル・マッソン訳の開きの少なさと，このヴェラール版の大幅な書き換えを考えるならば，少なくともこの「ボッカチオの序文」では，ル・マッソンやロフェが「攻撃」していた訳者名のない「旧訳」とは正にこのヴェラール版であり，逆に「出来の良い」ル・マッソン訳にプルミエフェ訳が近いのだとすれば，上述したような二つのハンデキャップを乗り越えてル・マッソン訳のレベルに近付けていたプルミエフェの翻訳の力量は相当のものと言わざるえない。正に「15 世紀ユマニスト」の執念である。他方で，ヴェラール版が全く価値のないものと考えることは正しくないだろう。彼は印刷書籍商として売れるために「脚色」を施したわけで（事実，上述したように版を何度も重ねた事はこれを証明している），これがオリジナルから離れれば離れているほど，15 世紀末から 16 世紀の読者が求めた「読書の世界」を探る意味で貴重な「仏訳」となりうるのではないだろうか[28]。

結論にかえて

本論の性質上，ここで結論を導き出すことは避けねばならないが，以上の分析から第一日目以降の「物語」nouvelle を今後比較分析して行くにあたって問題点を整理しておきたい。第一，この序文で見られたプルミエフェ訳とル・マッソン訳の開きの少なさと，このヴェラール版の大幅な書き換えがどの程度変化する，又はしないか。この序文では見られなかった人物名，地名等の固有名詞の訳し方や，プルミエフェ訳に見られた訳語の補加にも注意していきたい。第二，この比較によりル・マッソンが仏訳するにあたって，イタリア語原典とともにヴェラール版やプルミエフェ写本を参照していたかどうか[29]。第三，「ボッカチオの序文」ではプルミエフェ訳とル・マッソン訳で「楽しいと同時に徳を学ぶことが出来る」と訳したものの，実際は訳者の序文で述べているように，「楽しさよりも役に立つことを多く見つける」ことができるのか，つまり訳者の意図がどのように反映されているのかを調査していく。

1) 詳細は拙論「仏訳『デカメロン』研究 I —ローラン・ド・プルミエフェ，翻訳者又は教訓家—」，『名古屋短期大学研究紀要』第 35 号，名古屋短期大学，1997 年，pp.93-117 を参考にしていただきたい。(http://home. hiroshima-ac.jp/hirate/etudes.html)

2) テクスト引用の表記（及び注記）については本論文の性質上煩雑を極めるので，以下のように整理する。"Boccaccio"がイタリア語原典の Boccaccio, G., Decameron, a cura di V. Branca, Torino, Einaudi, 1987 を示し，"Premierfait"はプルミエフェ訳の校訂本 Boccace, Decameron, traduction (1411-1414) de Laurent de Premierfait par Guiseppe Di Stefano, Montréal, CERES, 1998 (実際の出版は 1999 年)を，"Vérard"は 1485 年ヴェラール版の写真版 Le Decameron de messire Jehan Bocace Florentin, traduit de l'Italien en Français par maistre Laurens de Premierfait, achevé d'imprimer à Paris le 22 octobre 1485, Paris, Vérard, 1485 を，そして"Le Maçon"はル・マッソンの新訳 Le Décaméron de Jean Bocace, traduict d'italien en françoys par maistre Antoine Le Maçon, avec Notice, Notes et Glossaire par Frédéric Dillaye, A. Lemerre, 1882-1884, 5 vols をそれぞれ示す。なおイタリア語原典には，岩波文庫版野上素一訳『デカメロン（十日物語）』（全六冊），1975 を参考にした日本語訳を付す。また，以下の引用文での下線強調は論者により，年号はいわゆる新式 nouveau style を用いた。

3) «L'une, pource que en langaige vulgar ne peut estre gardee plainement art de rhetorique, je useray de paroles et de sentences promptement entendibles et cleres aux liseurs et escouteurs de ce livre sans riens laissier qui soit de son essence; l'autre chose est que ce qui semble trop brief ou trop obscur, je le alongiray en exposant par mots et par sentences.» (De la vieillesse, BN fr. 1020 f.3)これは Purkis, G.S., "Laurent de Premierfait: First French Translator of the Decameron", in *Italien Studies*, t. IV, 1949, p.27 より引用。

4) このイタリア語原典写本に関して，ディ・ステファノ G. DI STEFANO は『デカメロン』校訂版の序文で，ボッカチオ直筆の Hamilton 写本とパリ BN it.483 写本を比較して，後者に近いながらも両者の「折衷的なテクスト」texte hybride を，プルミエフェが使用し，おそらくこれは 1370 年代以降に作成された写本であると推測している。Premierfait, pp.XXV-XXVI.

5) Vatican 写本は 1414 年から 1420 年にかけて作成されたようで，プルミエフェの指導が入ったとすれば 1418 年頃かもしれない（Premierfait, p. XIII)。なおディ・ステファノによる校訂本の底本はこの Vatican 写本である。現存写本の分析は Bozzolo, C., *Manuscrits des traductions françaises d'œuvres de Boccace, XVe siècle*, Padova, Editrice Antenore, 1973, pp.25-29, pp.100-110, pp.155-165, pp.183-186 及び Di Stefano, G., "La première traduction française du *Decameron*, le ms. Paris, BNF, FR.239 et la nouvelle de Iancofiore (VIII, 10)", in *Romania*, t.117, 1-2, 1999, pp.160-185 を参照。

6) 拙論「仏訳『デカメロン』研究 II—アントワーヌ・ヴェラール，出版書籍商，又は戦略家—」，『広島大学総合科学部紀要　言語文化研究』第 25 号，広島大学総合科学部，1999 年，pp.107-132 を参考にしていただきたい。(http://home.hiroshima-u.ac.jp/hirate/etudes.html)

7) Vérard, cclxv-v.

8) 以下に現存する版本を整理しておく。この版本の調査には，Moreau, B., *Inventaire chronologique des éditions parisienns du XVIe siècle*, 4 vols., 1972-1992; Woledge, B., *Bibliographie des romans et nouvelles en prose française antérieurs à 1500*, Droz, 1975; Woledge, B., *Bibliographie des romans et nouvelles en prose française antérieurs à 1500 supplément 1954-1973*, Droz, 1975; Sozzi, L., "Boccaccio in Francia nel cinquecento", in *Il Boccaccio nella cultura francese*, Firenze, Leo S. Olschi Editore, 1971, pp.211-356 及びパリの B.N.(http://www.bnf.fr/web-bnf/catalog/index.htm) と Catalogue collectif de France(http://www.ccfr.bnf.fr/)の opac 検索を利用した。

1485 年 11 月 22 日　Paris, A. Vérard: BN Y2. 402; Stockholm, Bibl. Roy. P. fr. 2445.

1503 年頃　Paris, A. Vérard: BN Rés. Y2.205; BN Vélins 639; Chantilly, Musée Condé?

1511 年　Paris, A. Vérard 又は Girault

1521 年　Paris, Veuve de Michel Le Noir: BM C.47.f.24; Chicago, Newberry Library; Munich, Bayerische Staatsbibliothek; Oxford, Bodleian Library; Washington, Library of Congress

1534 年 8 月 28 日　Paris, Jean Petit: Chantilly, Musée Condé (sans adresse) ; BM 243.f.19

1537 年　Paris, de l'escu de France (Lotrian?): BN Y2.2992

1537 年　Paris, de St.J. Baptiste (D. Janot?)

1537 年　Paris, L'Angelier?

1537 年　Paris, Regnault?

1540 年　Paris, A. Girault

1541 年　Paris, Oudin Petit: BM 1074.f.5

9)　Hauvette, H.,*Les plus anciennes traductions françaises de Boccace (XIVe - XVIIe siècle)*, extrait du *Bulletin Italien* de 1907, 1908, 1909, Bordeaux, Peret & Fils, 1909, pp.74-79.

10)　B. チェッリーニ『チェッリーニ自伝』, 古賀弘人訳, 岩波文庫（全 2 冊）, 1993, 下, p.65; Benvenuto Cellini, *La Vita*, a cura di Lorenzo Bellotto, Fondazione Pietro Bembo / Ugo Guanda Editore in Parma, 1996, p. 522, p.523.

11)　Chavy, P., *Traducteurs d'Autrefois, Moyen Age et Renaissance, Dictionniare des traducteurs et de la littérature traduite en ancien et moyen français (842-1600)* , t.II (K-Z), Champion-Slatkine, 1988, p.864.この考え方にオーヴェットは否定的である。Hauvette, H., *op.cit*, p.79 note12.

12)　オーヴェットはこの時期をマルグリット・ド・ナヴァールの書簡の日付から 1532-1533 年頃と推定している (Hauvette, H., *op.cit*, p.78)。ジュナン F. GENIN 編纂の書簡集（Genin, F., *Lettres de Marguerite d'Angoulême, sœur de Français Ier, reine de Navarre*, publiées d'après les Manuscrits de la Bibliothèque du Roi, J. Renouard, 1841, 及び *Nouvelles lettres de la Reine de Navarre adressées au roi François Ier*, J. Renouard, 1842）を繙くと，確かにナヴァール公妃は 1532 にパリからアンヌ・ド・モンモランシー Anne de Montmonrancy に手紙を送り，ベダ N.BEDA がパリの神学部で行った演説から生じた誤解を解く一方で，遠く離れたフランソワ一世への援助を要請している（pp.282-283)。しかし，この「物証」だけから判断するのは早計ではないだろうか。ジュルダ P. JOURDA はマルグリット・ド・ナヴァール伝の中で，この会見の時期を正確には特定できないとしながらも，1540-1541 年頃としているし（Jourda, P., *Marguerite d'Angoulême, Duchesse d'Alençon, Reine de Navarre (1492-1549)*, étude biographique et littéraire, Champion, 1930; Slatkine Rep., 1978, t.I, p.257, note33）,

ナヴァール公妃の当時の足跡をたどると，1530 年代でも少なくとも二度（1533 年 6 月，1538 年 12 月）パリにいたことがわかっている（*ibid.*, t. II, appendice A, pp.1090-1091）。また後述するように（次注参照），この『デカメロン』仏訳の依頼は『エプタメロン』*Heptameron* 創作の契機にも関係するように思われる。

13) 「マルグリット・ド・ナヴァール公妃への献辞」からはこのような経緯を読み取ることが出来るが，マルグリット・ド・ナヴァールがこの仏訳を命じたことは，単に『デカメロン』が面白そうだというだけではなく，この仏訳を自らの作品『エプタメロン』の創作に結び付けていたと考えられる。例えばジュルダはナヴァール公妃が既に幾つかの「物語」nouvelle を書いていたが，1540-1542 年にル・マッソンの仏訳原稿を読んで触発され，「フランス版デカメロン」Décaméron français を書く計画を立てて，直ちに実行に移し，1546 年までに大部分を完成したと推測している（*ibid.*, p.675）。他方で，ユション M. HUCHON は各「物語」nouvelle の「三部構成」tripartition に着目して『エプタメロン』とヴェラール版及びル・マッソン版を比較した結果，マルグリット・ド・ナヴァールがヴェラール版とイタリア語原典又はプルミエフェ訳との照合を行って新訳の必要性を感じ，ル・マッソンにこれを依頼したと推測している。Huchon, M., "Définition et description: le projet de l'Heptameron entre le Caméron et le Decaméron", in *Les visages et les voix de Marguerite de Navarre*, colloque de Duke University, 10-11 avril 1992, Klincksieck, 1995, p.60. ル・マッソンがフィレンツェから帰還した 1531-32 年には，『短篇の鏡』*Le Parangon de nouvelles* と呼ばれる短篇物語集が出版されており，フランスではこの 1530 年代からこのような短篇物語集が本格的に発展していく。（この短篇物語集はヴェラール版仏訳『デカメロン』を始め，ポッジォ POGGIO の『風流滑稽譚』*Facécies*，『ティル・オイレンシュピーゲル』*Ulenspiegel*，ロレンツォ・ヴァラ Lorenzo VALLA の教訓話 *Apologues* の仏訳から何編かを選んで集めたものである。この作品については拙論「*Le Parangon de nouvelles* の特徴と問題—フランス，1531 年，nouvelle—」，『大阪大学言語文化学』第 2 号，1993 年，pp.41-53 で既に論じたので，これを参照していただきたい。http://home.hiroshima-u.ac.jp/hirate/etudes.html）既に何編かの物語 nouvelle を書き始めたマルグリット・ド・ナヴァールが，当時出回っていたこれらの短編集を目にしたことは間違いないだろう。となれば，自らの創作活動のために，オリジナルとの比較やオリジナルに忠実な訳の必要性を感じたことは十分に考えられる。

14) Le Maçon, p.4.

15) Le Maçon, p.5.

16) オーヴェットとクルーゼも断念。ディ・ステファノによれば，ル・マッソン

が利用したイタリア語原典はプルミエフェとアントニオ・ダレッツォが利用したものとは異なるらしい。Premierfait, p.XXVII.

17) 正確には「我が敬虔なる公妃マルグリット・ド・ナヴァール様へ」A la serenissima Mad. Margarita Regina di Navarra mia Signora osservandissima。このフェレッティとはトスカーナ生まれ（1489 年）の法律学者 Emile FERRET で，ヴァランスで法律を教えた後フランソワ一世によりパリの高等法院判事に迎え入れられ（1536 年），数々の外交の場で王に重用され活躍した。この手紙の中では翻訳不可能と思われた『デカメロン』を見事にフランス語にしたル・マッソンの功績を讃えている。なお，この手紙によると，ル・マッソンは仏訳の仕事をフランソワ一世の腹心の部下として優雅にこなしたのではなく，農業に従事する傍ら，妻と多くの子供の世話にも追われ，大変な苦労をして完成させたようである。（オーヴェットによれば，妻はルイーズ・ド・ヴージュ Louise de Vege で，彼女との間に少なくとも息子が三人いたようである。Hauvette, H., *op.cit*, p.74） このフェレッティの手紙は Sozzi, L., "Per la fortuna del Boccaccio in Francia: i testi introduttivi alle edizione e traduzioni cinquecentesche", in *Studi sul Boccaccio*, VI, 1971, pp.28-32 で読むことが出来る。また，フェレッティについては Bayle, P., *Dictionnaire historique et critique*, t. II, cinquième édition de 1740, Slatkine R., 1995, pp.459-460 を参照。

18) Voyez Lecteurs ceste belle leczon / Plus à priser que nul riche ediffice / Que pour vous a basty nostre maçon, / Maçon accreu du roy par son service: / Si congnoistrez que moins n'est son office / (Si bien faisant) de livres translater, / Que manier finances et compter: / Car Bocace est icy mieulx recongneu, / Que si luy mesme à se faire escouter / Fust de Florence en France revenu. Sozzi, L.,"Per la fortuna del Boccaccio in Francia", *op.cit.*, p.32 より引用。

19) この異同についてはオーヴェットが分析している。Hauvette, *op.cit.*, pp.92-95.

20) 版本には BN Rés. Y2.2263; B.M. de Montpellier 34626RES, Fonds ancien; B. Carré d'Art (Nîmes), 60833, Liotard がある。

21) Hauvette, *op.cit.*, pp.95-97.このルメール版には誤植が多く（例えば「緒言」で ROFFET とするところを ROSSEL している。Le Maçon, p.7），ル・マッソン訳の校訂本が待たれる。現在モントリオールの CERES でこの 1545 年版が出版準備中であり（Premierfait, p.XXVIII），2001 年には出版されるとのことである。以下にル・マッソン訳の版本を整理しておく。

1545 年 Paris, E.Roffet: BN Fol. Y2.222; BN fb.5330; BN Rés.G. Y2.317; BN Rés.G. Y2.387; BN Rés.Y2.206; B.M. J. Prévert (Cherbourg) 4491 in 12, Fonds ancien 2; B.M. de Montpellier, C34, Fonds ancien; A M.G. Heilbrun

1548 年 Paris, E. Roffet: Arsenal 8oB.L.29025

1551 年 Lyon, G. Roville

1551 年 Paris, Groulleau

1551 年 Paris, L'Angelier

1552 年 Lyon, G. Roville

1554 年 Paris, Thibout

1556 年 Lyon, G. Rouille: B. Médiathèque de Metz, PP523, Fonds ancien 1

1556 年 Paris, Thibout?

1558 年 Lyon, G. Rovill; impr. Par Ph. Rollet: B.M.Lyon, Rés 811882, CGA

1559 年 Paris, Martin le Jeune: B. Carré d'Art (Nîmes), 61436, Liotard; 61436, 16ème siècle

1560 年 Lyon, G. Rovill: BN Rés. Y2.2273; B.M. Lyon, Rés 810941, CGA

1873 年 P. Lacroix による Jouaust 版（1545 年 E. Roffet 版）

1879 年 A. Bonneau による Liseux 版（1551 年の G. Roville 版）

1882-84 年 F. Dillaye による Lemerre 版（1551 年の G. Roville 版）

2001 年 R.M. Bilder による CERES (Montréal)版（1545 年 E. Roffet 版）準備中

22) Sozzi, L., "Per la fortuna del Boccaccio in Francia", *op. cit.*, p.33.

23) かつて，サルワ P. SALWA がイタリア語原典，プルミエフェ訳，ヴェラール版の三点の比較研究をワルシャワ大学に学位論文として提出するために，第一日目冒頭の「シャプレットの物語」を分析したが，その際使用されたプルミエフェ訳は Arsenal, 5070 写本で，残念ながらル・マッソン版は対象とされなかった。Salwa, P., "La primo novella del Decameron nell'edizione di Antoine Verard del 1485", in *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp.121-128.

24) Di Stefano, G. "La Traduction du Décaméron", dans *Essais sur le moyen français*, Padova, Liviana Editrice, 1977, p.69.

25) なおこの写本には Proemio, Introduzione 1~15, VII-1-16~9-32, IX-10-12~8-50 が欠落している。Hamilton 写本の詳細については Branca, V., *Tradizione delle opere di Giovanni Boccaccio*, t. II, Roma, Edizioni di storia e letteratura, 1991, pp.211-262 及び Branca, V., "Su una redazione del "Decameron" anteriore a quella conservata nell'autografo Hamiltoniano", in *Studi sul Boccaccio*, XXV, 1997, pp.3-131 を参照。なおこの欠落部分はブランカの校訂本では Laurenziano Mannelli 本(XLII)(1384 年)で補われている。従って，本論が比較する Proemio は結果的に Laurenziano Mannelli 本を利用したことになる。

26) ディ・ステファノもまた「ボッカチオの序文」冒頭部を一部比較して，プルミエフェ訳が説明的であり，ル・マッソン訳が原文に近いと分析している。Di Stefano, G. "La Traduction du Décaméron", *op.cit.*, pp.70-71.

27) これをディ・ステファノはプルミエフェ訳全体に渡る特徴として élément binaire と呼んでいる。*ibid.*, p.71.

28) 事実，ユションは nouvelle の研究におけるヴェラール版仏訳『デカメロン』の果たす役割の重要性を説いている。Huchon, *op.cit.*, p.56 note24.

29) ディ・ステファノによれば，ル・マッソンがこの仏訳作業にヴェラール版を参照した可能性が高いとしている。しかし，プルミエフェ訳の写本を参照したかどうかははっきりしていない。Di Stefano, G., "Il Decameron: da Laurent de Premierfait a Antoine Le Maçon", in *Pratiques de la culture écrite en France XVe siècle*, Louvain-La-Neuve, Fédération Internationale des Instituts d'Etudes Médiévales, 1995, p.129.

Etude sur la traduction française du *Decameron* (III)
-Anthoine Le Maçon, troisième traducteur, et la comparaison-

HIRATE Tomohiko

Anthoine Le Maçon, conseiller à la cour de François Ier, qui excellait en italien, a achevé la troisième traduction du *Decameron* en 1545. Marguerite de Navarre lui avait commandé de traduire cette œuvre gigantesque de Boccaccio, pour la raison qu'une de deux anciennes traductions, soit celle de Laurent de Premierfait (1414) pour laquelle Antonio d'Arezzo avait préparé une version latine du texte, soit celle d'Anthoine Vérard (1485) qui avait modifié la traduction de Premierfait, n'était pas satisfaisante. Seul son titre méritait d'être regardé selon le mot de l'éditeur de la traduction de Le Maçon. Bien que le *Decameron* soit parsemé de nouvelles "follastres & plaisantes", Le Maçon, comme ses prédécesseurs, le tient plutôt pour un ensemble de textes édifiants.

La comparaison des trois traductions se heurte aussitôt à un obstacle: aucun de textes de référence (manuscrits, éditions) n'a été à ce jour identifié ou retrouvé. Etant donné la situation, nous avons choisi de confronter chacune des trois traductions avec l'original italien, manuscrit autographe de Boccaccio. Dans cette étude, nous avons retenu le "proemio" de Boccaccio comme objet d'analyse. Nous avons éclairci en particulier quatre points. Premièrement, il n'y a pas de différence importante entre la traduction de Premierfait et celle de Le Maçon. Deuxièmement, malgré cela, Premierfait a tendance à traduire le texte en ajoutant des mots complémentaires; il restitue le sens d'un mot avec deux termes, procédé de traduction dénommé "élément binaire". Troisièmement, Le Maçon visait une traduction à la fois plus élaborée et scrupuleusement fidèle au texte original. Dernièrement, Vérard a transformé le "proemio" de Boccaccio en une "introduction" si différente qu'il est légitime de penser que, pour le "proemio", c'est cette traduction qui doit être jugée mauvaise.